

ニックリッシュの価値論

大橋 昭 一

は し が き

ニックリッシュ経営学のきわめて大きな特徴の一つは、その主張が、第一次大戦およびその敗戦によって生じた諸条件の変化とともに起ったドイツ資本主義の変容に依りて、大きく変化したことである。一九一二年の利潤論的即物的な私経済学から規範的経営経済学への転換、経営共同体思想の登場が要するにそれであり、かれの方法論的立場は、基本的には、有機的全体を主張する浪漫主義的普遍的普遍主義 (Universalismus) に移行したのである。ニックリッシュはこのような新しい立場についての自己の根本的な考え方を、すでに一九二〇年の “Der Weg aufwärts! Organisation” (『組織論』) において展開し、それにしたがって一九二一年には旧来の所説に一応の修正を加え、一九二二年の “Allgemeine kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie)” (『商事経営学』) の第五版として “Wirtschaftliche Betriebslehre” (『経済的経営学』) を世に問うたのであるが、しかし『経済的経営学』においては、その転換は未だ首尾一貫しておらず不十分なものであったのであって、それは、一九一二年の利潤論的即物的私経済学と新しい立場との折衷的なものであったにすぎない。そこでニックリッシュはさらに、一九二九〜三二年に第七版として “Die Betriebswirtschaft” (『経営経

ニックリッシュの価値論 (大橋)

『一済』を発表するにいたるのであり、そこにおいて、『組織論』において主張された根本的立場からする経営経済の理論をば、ニッケリッシュとしては一応究極的な形^①で展開するのである。

ところで、ニッケリッシュ経営学の一つの特徴は、その学説体系がかれ独特の価値理論に基礎をおいていることであり、そのことは、かれの経営学の出発点となつた一九二二年の『商事経営学』以来一貫している。同書においては、^②当時のかれの方法論的立場に照応して、限界効用学派国民経済学に依拠して価値理論が展開されたのであるが、ニッケリッシュ経営学の転換過程において、価値に関するかれの主張はどのように推移し、どのような性格をもつものに発展したであらうか。本稿は、『組織論』および『経済的経営学』に代表されるいわゆるニッケリッシュ第二期、とりわけ、『経営経済』に代表される第三期におけるかれの価値学説を検討することを通じて、ニッケリッシュ経営学の到達点におけるニッケリッシュの根本的な思想的方法論的立場を解明する手がかりをえようとするものである。

注① H. Keinhorst, Die normative Betrachtungsweise in der Betriebswirtschaftslehre, Berlin 1956, S. 85.

② W. Ruf, Die Grundlagen eines betriebswirtschaftlichen Wertbegriffes, Bern 1955, S. 108.

一 ニッケリッシュ第二期の価値理論

まず、ニッケリッシュ経営学の土台が表明された一九二〇年の『組織論』において、価値についてのどのような見解のべられているかを明らかにしておく。同書によると、欲望(Bedürfnis)が物質を含めての一切の運動の起動力であり、その欲望を充足するところに一切の問題はかかわるのであるが、欲望は、人間の場合意識において発生し、そしてそれが感情(Fühlen)・認識(Erkennen)・意欲(Wollen)・行為(Handeln)と発展し、この行

為によって目的結果 (Zweckwirkung) が得られ、それによって欲望が充足されることになる。すなわち、欲望は快 (Lust) — 無関心 (Gleichmü) — 不快 (Unlust) の感情としてまず意識にうけとられるが、次にこの知覚のもつ意義が解明される。これがニックリッシェによる認識であるが、この知覚の中に含まれている意義 (Bedeutung) を、かれは価値 (Wert) と称するのである。かれは、「価値づけること (Werten) は認識することの本質的構成要素であり、価値は認識の本質的構成要素である」として、それにもとづいて、一九二二年にはニックリッシェ自身主張していたところの没価値判断は誤りであると、価値判断を認めるにいたるのであるが、価値そのものについては二種類の価値があるという。第一の価値は「事物の全体における意義」であり、「全体の構成要素としてその事物が全体にたいして有する意義」である。これにたいして第二の価値は、「事物が人間にたいして、人間の欲望にたいしてもつ意義」である。たとえば財が有する経済的価値はこの第二の価値であると、ニックリッシェはさらに説明を加えているが、いずれにしろ双方の価値はともに、価値が人間の意識における問題であり、意識において人間がもつ意義である点はかわらないのであり、相違するのは、価値づける尺度が、前者の価値では「われわれが感情として前に意識したものの全体」であるのに、後者の価値では「人間の、しかも個々の人間の欲望」であるという点だけである。したがって、両者はともに根本的には主観的な性質のものであるが、第二の価値は、第一の価値にくらべれば、とくにそうであり、そうした意味において第一の価値は客観的なものといっても正当である、とニックリッシェは特徴づけている。

かようなニックリッシェの二つの価値概念を、ヴィットマンは端的に客観的価値、主観的価値と名づけているが、しかしその客観的価値が、労働価値学説で代表されるところの客観的価値学説でいういわゆる客観的価値とは本質的に異なるものであって、そうした観点からはあくまで主観的価値に属するものであることは、いうまでもないと

ころであるが、十分注意されなくてはならない。ニックリッシュ自身も両者はともに主観的なものであるが、第二の価値は厳密な意味においても主観的なものであって、それにくらべれば第一の価値は客観的といっても正当であるとのべているにすぎない。ともかくニックリッシュは、この段階においても、価値を主観的価値の意味において理解しているのであり、その点に関する限りにおいては、一九二二年の第一期の所説や、したがってその基礎となっている限界効用学派国民経済学の主張となら相違するところはない。しかしながら、第一の価値の、全体にたいする意義という客観的価値についての主張は、旧来にはみられなかったものであり、ニックリッシュの第一期から第二期への転換を特徴づけるもの一つであるということができる。ところで、この際の全体とは、ニックリッシュの説明によると、感情として意識されるものの全体という意味におけるそれであるにすぎないが、考え方の問題として、知覚されたものが孤立的状态においてではなくて、あくまで全体的関連において、全体の部分としてのみ意識されうるということが強調されているのであり、それは、価値問題にたいする浪漫主義的な全体主義的な考え方、よし萌芽形態であるとしても、登場としてとらえられることができるであろう。また、客観的価値と主観的価値との関連については、全くなんらの説明も与えられていないのであり、要するに、両者の体系的関連づけをはじめ価値の統一的な体系的な規定は、一九二九～三二年の『経営経済』まで待たねばならないが、客観的価値という浪漫主義的普遍主義的思想にふさわしい価値概念が、すでに一九二〇年の『組織論』において登場していることは、決して看過されてはならないであろう。

一九二二年の『経済的経営学』は、確かに『組織論』において主張された思想の影響をうけており、それは、たとえ企業とならんで経営が登場したことや、経済性論の登場などに現われているが、価値概念に関しては、基本的には、一九二二年の著の部分的な敷衍、修正にとどまっているにすぎない。たとえば価値の規定を欲望充足から

出発しておこない、経済における根本的価値は適性価値 (Eignungswert) であると規定したりしているが、それ以上の展開はみられない。同書においてはじめて登場した価値循環論にしても、当時においては価値の問題というよりは循環、流れの問題として、資産の運動、流れすなわち Umsatz や Absatz を統一的関連的に説明する理論として提示されているにすぎない。^⑧

かくて今やわれわれは、ニックリッシュ経営学の一応の到達点『経営経済』をとりあげ、そこで展開されている価値論を検討しなくてはならぬ。

注⑧ H. Nicklisch, Der Weg aufwärts! Organisation, 2. Aufl., Stuttgart 1922, S. 23ff.

⑨ Nicklisch, a. a. O., S. 28.

⑩ Nicklisch, a. a. O., S. 30.

⑪ Nicklisch, a. a. O., S. 28.

⑫ Nicklisch, a. a. O., S. 29.

⑬ W. Wittmann, Der Wertbegriff in der Betriebswirtschaftslehre, Köln und Opladen 1956, S. 11.

⑭ H. Nicklisch, Wirtschaftliche Betriebslehre, Stuttgart 1922, SS. 11—12.

⑮ これらの点に關しては拙稿「ニックリッシュ経営共同体論の生成過程」関西大学商学論集、関西大学創立八〇周年記念特集号所収、を参照されたい。

二 価 値 概 念

① 同書においてニックリッシュはまず、経営経済学の対象が「経営とよばれる経済単位の生活である」と規定する。このことはニックリッシュ経営経済学の対象が経営そのものではなくて経営の生活であり、生活一般ではなくてあくまで経営の生活であることを端的に表明するものであるが、では経営の生活とは何をいうのか。ニックリッ

ニックリッシュの価値論(大橋)

シュによれば、それは経済の生活である。すなわち「経営の生活は経済の生活である、なんとなれば経済は経営以外においては生活しえないからである」^①。したがって端的には「経済が対象として注視されねばならない」のであるが、ではニックリッシュのいう経済とは何をいい、経済の生活とは何をいうのか。ニックリッシュによれば「経済の生活は、人間が価値を捕捉、産出し、それを欲望充足のために準備するところに尽きる」^②。つまりニックリッシュによれば、経済の生活、したがって経営の生活の究極的目的、意味は確かに欲望と充足との間の間隙の架橋(Uberbrückung)ではあるが、欲望充足の架橋そのものは人間の生活一般を規定する一般的メルクマールであって、それが直ちに経済の生活となるのではない。経済生活を経済の生活たらしめる特殊性は、ニックリッシュによれば要するに、欲望充足を価値の問題として把握するところにあるのである。

以上のようにニックリッシュにおいて経済の特殊性を明らかにするものは価値なのであるが、では、欲望充足を価値の問題としてとらえ問題にするとはいかなることであろうか。それはとりも直さずニックリッシュの価値概念を明らかにすることであるが、価値概念についてニックリッシュはまず第一に、一切の価値の根本をなすものは欲望の充足であるという。そして、たとえばエーレンベルヒらによって主張されたような、欲望充足手段の不足性(Knappheit)が価値の根本であるという見解は、^③ 価値形成の条件を指摘したものにすぎず、^④ 価値の根本そのものを明らかにしているものではないという。^⑤ かくして、価値概念を規定する第一のメルクマールは、欲望充足にたいする適性(Eignung zur Befriedigung)であり、^⑥ その適性は事物の物量と、その適性の度合とによってきまる。しかし欲望の充足手段のなかには、たとえば空気のごとく、確かに充足の適性を有するが、人間にとってはなんらの価値を有しないものがあり、その欲望は確かに欲望ではあるが、経済すべき欲望(das Bedürfnis zu wirtschaften)ではなく、したがって経済の域外にとどまるものである。すなわち欲望は、それ自体としては、あくまで

価値の根本、土台をなすものにすぎず、欲望充足の適性一般が直ちに、少なくとも経済学上での価値とはなりえないというのである。では、経済上の価値とは何か。それは、ニックリッシュユによると「欲望充足を確保するのに労働を必要とするものである」^④。すなわち、欲望充足そのものと価値との差異はまず第一に労働に求められるのである。ここで労働とは、適性の存在する場所と消費の場所との懸隔を克服するものか、適性の産出そのものかのいずれかの労働であるが、^⑤ いずれにしても、かくして労働がニックリッシュユ経営学においてきわめて重要な地位を占めてくることになる。

労働の重要視、物から人への重点の移行は第二期以来進められてきたことであり、それが、人間には全く関心をよせず、企業を、経済を純即物的に客体的にのみ把握した第一期にたいする第二期の大きな特徴の一つであったが、しかし第二期においては、価値論は基本的には第一期の価値論がほとんどそのまま踏襲されていて、労働は価値概念の規定に関しては重要な意味を与えられていなかった。すなわち『経済的経営学』では欲望充足の適性が重視され、「経済における根本的価値は適性価値である」とされて、適性をもつものが直ちに価値をもつものと主張されていた。しかもこのような古い価値規定が、実は、『経営経済』の第一分冊が刊行された前年、一九二八年の論文“Wert, wirtschaftlicher Wert, Bilanzwert”においても依然としてとられている。それによると価値には広狭二つの種類があり、広義の価値は、財が欲望充足にたいしてもつ意義であって、それは財の技術的適性によってきまる技術的価値たるものであるが、狭義の価値は経済的価値であって、それは財在庫 (Vorrat) と欲求 (Bedarf) との関係、供給と需要とから生ずる一切の作用を含んだものであって、市場価値ともいわれ、価格に現われるものであるとされており、一九二二年の『商事経営学』における価値規定となら異なるところがない。

ニックリッシュの価値論(大橋)

される場合の基礎の本質的要素である」ことが主張され、労働の重要視、物から人への重点の移行は、ここにおいて価値論にまでおし進められ、一応の完成をみるのである。

しかしながら、労働を価値の本質的要件とすることは、それによってニックリッシュの価値学説が労働価値学説に移行したことを意味するものでは決してない。もともとニックリッシュは一義的に価値概念を規定していないばかりではなく、数多くの価値概念を提示していることで有名であって、^④ 価値概念の規定は読者にまかされているのであるが、まずニックリッシュのように以上のごとく価値を規定すると、価値概念がきわめて狭いものとならざるをえず、たとえば古典学派やマルクスらのいう使用価値は経済上の価値ではなくなるし、また交換価値にしても、それ自体だけでは、価値とならなくすることに注意されなくてはならない。周知のように、マルクスによれば^⑤ 価値には使用価値と交換価値とがあり、両者を契機とする弁証法的統一物として成立するものは、商品である。ニックリッシュには商品なる概念はない。要するに、マルクスの見解によれば商品であるところのものが、ここでは、ニックリッシュによれば価値と表現されるのである。もちろん価値をニックリッシュのように規定するのは自由であるけれども、その場合においても、一九二八年の論文における価値と『経営経済』における価値とが範疇を異にするべき概念ではないかという疑問は残る。結局ここでまずわれわれが指摘したいことは、マルクスなどにおいていう価値の次元と商品の次元との間の混乱が、ニックリッシュにあるのではなからうかということである。

さて、適性と労働とによって価値は成立し、しかも両者の関係は、原因―基礎―結果の運動図式において、労働が基礎、生まれた適性は結果たる関係にたつものであるから、労働と適性⇕充足物とは相互に対応しあい、経済は要するにこの両者の関係の問題であることになる。その際充足物は労働にたいする対価たる関係にたつものであるから、この点からすれば経済は、ごく一般的には、給付 (Leistung) と給付されるもの (Geleistet) との関係とし

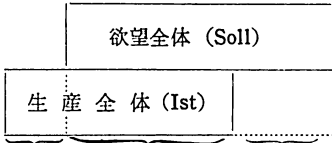
てとらえられることになる。^⑤ここにいうまでもなくニックリッシュの経済性概念の根本はあるのであるが、それはともかく、価値は給付の側面からと給付されるものの側面とからとらえられることになる。前者は生産者にとって問題になる価値であり、ニックリッシュによると、それは労苦の感覚 (die Empfindung der Mühe) であり、生産に要した時間と生産手段の費消 (Aufwand) についての観念であり、費消が生産者にたいしてあつて意義である。後者は欲望者にとって問題になる価値であり、それは適性と物量が欲望者の欲望充足にたいしてもつ意義である。^⑥両者は、生産者によるにしろ欲望者によるにしろ、ともかく評価 (Wertung) による価値なのであつて、労働といふ適性といつても、人間の主観とは無関係に事物に客観的に存在する労働とか適性による価値ではない。もちろん、ニックリッシュによれば、以上の評価が直ちに現実の価値として妥当しうるのではなくて、それらは本来の評価のいわば準備段階である前評価 (Voraussetzung) とはいわれうるものであつて、現実の価値は、事物が欲望充足物として現われる時点における現実の諸関連、すなわち諸価値形成要素についての感覚によつてきまり、しかもいずれか一方のみの単なる評価ではなくて、意識において統一的に発生する価値効力 (Wertgeltung) として成立するものであるが、^⑦いづれにしろ、ニックリッシュのいう適性や労働が客観的価値学説でいう意味におけるそれではなくて、限界効用学派などの主観的価値学説においていわれる意味でのそれであり、ニックリッシュのいう価値が主観的性質のものであることは、疑いないところである。

次に、ニックリッシュの価値規定に関する第三の命題として、われわれは「価値は実現 (Erfüllung) である」といふ命題をあげることができる。価値は、前述のように、欲望とその充足物との関係において生ずる問題であるが、ニックリッシュによると、価値形成上は欲望の側が第一次的なものであつて、充足物の側は第二次的なものである。さらに両者の間の関係については、孤立的に考えられてはならないのであつて、生産物が価値であるかどうか

ニックリッシュの価値論(大橋)

かは充足物が充分な量において生産されないこと、すなわち過剰に生産されないことに依存する、ということを一ツクリッシュは強調する。この結果欲望の充足は選択的となり、個々の欲望には順位(Rang)が生じる。したがって欲望は、順位のつけられた個々の肢体的欲望の有機的全体として、すなわち欲望全体(Bedürfnisgesamt)としてあらわれる。他方、欲望を充足すべき充足物も、給付者の能力や作業条件などによりきまる、その量と組合せにおいて一定な生産されたものの全体(Gesamt von Erzeugtem)としてあらわれる。欲望全体と生産全体とは必ずしも一致するものでないが、前者は、第一次的なものであり経済にたいする要求であるから、充たされるべき当為(Soll)たる意味をもち、後者はそれにとたいするいわば解答であるから実際(Ist)たる意味をもち、両者は当為—実際として対向する。そしてここにおいて価値とは、欲望全体を実際に充足した生産物をさすのであり、価値は欲望全体すなわち当為を実現したものである。欲望全体の充足されなかった部分は未存の、なお給付されるべき価値であり、欲望を充足した生産物の部分は既存の価値である。反対に、欲望全体からはみ出した、それを充足しえない生産物は無価値である。(上図参照)

さて、欲望を実現して生ずる諸個別的価値は、人間の意識においては、欲望全体や生産全体と同様、価値全体(Wertgesamt)としてあらわれる。価値全体は価値範疇(Wertkategorie)から構成される。価値範疇はそれぞれ諸肢体からなり、その諸肢体は当該範疇の単位価値からなる。価値全体において肢体および単位価値は有機的関係にあり、したがって、価値全体の變動とともに、個々の肢体、したがって単位価値はそれぞれ特殊な變動を示す。今価値全体にある価値量を与えられると、価値全体にたいしてもつ関係に応じて各肢体、各単位価値にもそれぞれ特殊な価値量が割り当てられることになる。この個々の単位に割り当てられた価値量を、ニックリッシュは特



無価値 価値全体 未存の価値

殊価値量 (spezifisches Wertvolumen) と云つける^⑧。それ故特殊価値量は、価値全体に与えられた価値量が不変のときにおいても、価値全体の構成のいかん、個々の単位の価値全体にたいする関係のいかんにより変動するのであり、したがってそれは、「その変動において、価値が有機的性質をもつものであることを最もよく表現するところの、価値の形式」であるのである。要するに、特殊価値量はある価値種類の価値全体において占める持分 (Anteil) を示すものであり、通常価格といわれるものがこれに相当するのであるが^⑨、では、欲望全体といふ生産全体といふまた価値全体という場合の全体とはいかなる意味における全体であろうか。この点に関するニックリッシュの叙述は必ずしも完全に明確とはいえないのであるが、特殊価値量が明らかにされるためにはこれが明らかにされねばならないし、また、『経営経済』におけるニックリッシュの価値概念の最大の特色の一つは、実は、この点にかかわるのである。

欲望と充足との関係を規定する価値問題は欲望と充足との架橋が問題となるところ、すなわち経済の生活があるところすべてに存在するが、しかしニックリッシュによると、経済の発展段階のいかんにしたがつて価値問題はその性格を異にするのである。経済の発展段階も当然に欲望充足のあり方によって区分される。ニックリッシュは経済の発展段階を区分する基準として二つのものをあげる。その第一は欲望充足の直接性のいかん、すなわち各人の産出するものと消費するものとが直結しているかどうか、つまり生産活動と消費活動との分業、生産経営と消費経営との分化のいかんという基準である。その第二は将来の欲望充足の保証にたいする責任を各経済単位が独立的に負担するかどうか、すなわち資本責任 (Kapitalverantwortlichkeit) が分離しているかどうかという各経済単位の独立性 (Selbständigkeit) のいかんという基準である。また第二の独立性のいかんの基準により家庭経済 (Hauswirtschaft) と独立的分業的経営による経済の段階とに分かれ、家庭経済の段階がさらに分業の存在のいかんによ

り閉鎖的家庭経済 (die geschlossene Hauswirtschaft) と分業的経営に肢体化されている家庭経営とに分かれる。^⑭ 閉鎖的家庭経済は自給自足的経済を、分業的家庭経済は中央管理的経済 (die zentralgeleitete Wirtschaft) を、そして独立的分業的経営による経済はいわゆる市場経済 (Marktwirtschaft) をなすものと理解されているが^⑮、分業のおこなわれている経済では各人の生産物と消費物とが直結していないために、両者を仲介するものが必要であり、ニックリッシュによれば、その仲介者は購買力 (Kaufkraft)^⑯ である。それは生産物にたいする代償 (Entgelt) として生産活動従事者に与えられ、そして欲望充足に必要なものの調達に使用されるものである。各人は、生産の領域においてその分業経済において産出されたものの全体にたいして各人が貢献した割合において、消費の領域において各人の欲望充足に適したものをその社会の生産物すなわち充足物の全体から受け取る権利があり、維持の法則はそのことを要請するから、購買力は生産物すなわち充足物の全体にたいする各人のこの価値持分 (Wertanteil) を示すものであり、また示しうるものでなくてはならない。このような価値持分が確定されうるためには、価値関係はまず抽象化される必要がある。すなわち、抽象的な価値計算 (Wertverrechnung) がなんらかの形で生産物の全体についてなされる必要がある、このためには一般的な価値尺度 (Wertmaß) が必要であり、抽象的な価値を表示する交換手段 (Tauschmittel) が必要となり、かくてここに資本なるものが現われることになる。要するに、分業的経済では、分業的家庭経済であっても独立的分業的経営からなる経済であっても、各経済単位で産出される生産物の全体を抽象的価値でもっておおうことが必要であるが、その場合の生産物の全体とはあくまで全体経済における生産物の全体であり、価値持分とはかかる全体にたいして全体経済の各構成単位が主張しうる割合であり持分なのであって、生産物の全体に与えられた抽象的価値の全体をば、いわば各人にいかに配分するかの問題である。かかる意味においてこの場合の価値計算は一種の成果配分計算である。すなわち全体経済的規模にお

ける成果配分計算であるということができるのであるが、これにたいして特殊価値量は、生産物全体に与えられた抽象的価値の全体を、生産物の各単位に割り当てる問題であり、各生産物単位の抽象的価値量を確定するものである。したがって、特殊価値量は生産の側面⇨生産物⇨給付価値と充足の側面⇨充足物⇨充足価値の両側面において成立する。かくして労働と充足との調和の問題は、分業的経済では、各人の産出した生産物の特殊価値量の総額と各人の入手する充足物の特殊価値量の総額とが等しいかどうかの問題として現われ、両者が等しいとき、各人は生産の面において全体に貢献した割合と等しいものを充足物として全体から受け取ることになり、給付通りの充足をなしうることになる。^⑧

ところで、独立性の原則が存在する独立的分業的経営による経済では、家庭経済におけるような意味での全体の存在は考えられないが、この点はどうのように説明されるであろうか。ニックリッシュによると、独立的分業的経営の経済では、価値関係の形成は独立的経営相互の交渉によってのみ可能であって、この交渉を思考上一つの総体的行程として総括したものが市場であり、交渉の対象となるものは特殊価値量である。^⑨すなわちここでは、価値関係の規制は特殊価値量の機構を通じてなされることになり、各経営は、たとえば自己の生産物の特殊価値量が高まれば生産を増大するよう刺激されるという形で、特殊価値量の変動に応じて自己に有利となるよう行動するから、独立的分業的経営の経済では、確かに担い手が経済全体という意味での全体意識は存在せず、したがって欲望全体や価値全体は、かかる全体意識のもとにあるものとしては存在しえないのであるが、市場量 (Marktgröße) として存在し、特殊価値量のメカニズムを通じて欲望全体と生産全体とから価値全体が成立することになる、とニックリッシュはいうのである。^⑩

以上のごとく、ニックリッシュによると、価値が成立するのは全体経済的次元においてであって個別経済的次元

ニックリッシュの価値論（大橋）

においてではなく、したがって価格たるものたる特殊価値量は、かかる全体経済という意味での全体において占める単位生産物の割合であり持分であることが決して看過されるべきではないのであって、抽象的価値表現といつても、ニックリッシュの場合のそれは、具体的物財にたいする等価という意味での単なる抽象的価値ではないのである。それはまさに浪漫主義的普遍主義的な価値概念と規定するに全くふさわしい主張であり、一九二〇年の『組織論』で展開された「事物の全体における意義」という価値理論をまさに体系的に展開したものにほかならない。さて価値問題は、以上のごとく、第一次的には全体経済的問題であり、価値は全体経済的範疇なのであるが、しかしながらニックリッシュによると、価値は、他方において、あくまで個別経済的な問題であつて、価値は常に経営の内部的条件によって規制される内面的な大きさ(Binnengröße)たるものである点が、さらに注意されなくてはならない。これが、われわれのみるところ、ニックリッシュの価値概念の第五の命題をなす。まず独立性の原則が存在しない家庭経済の段階では、それが閉鎖的なものであれ、分業的経営の肢体的構成によるものであれ、全体意思が存在し、その意思のもとに価値形成はおかれていますので、価値が内面的な大きさであることには問題は生じない。問題は、そのような全体の存在が考えられない独立的分業的経営による経済の場合である。この点に関してニックリッシュは三つの論拠をあげる。価値は前述のように生産の側面と消費の側面との両者においてまず問題になるのであり、それが、後述のごとく具体的出現形態としては、市場価値として一つに統合されるのであるが、価値は本来、生産の側面においては生産者、充足の側面においては欲望者による評価たるものである。この点にもとずいてニックリッシュは、ある一定量の物財が同一価値額(Werthbetrag)で経営に流入する場合においても、その一定量の物財にたいする評価は経営のいかにより相違し、したがつてその価値は相違することになる。すなわち市場でさまる価値額は、あくまで価値額であつて価値そのものではなく、価値は経営の内面にかかわる大きさであ

る、と主張するのである。^②また、市場で経営間の協定によって確定する価値額にしても、それは確かに経営にとつて所与ではあるが、しかしある時点における価値額と他の時点におけるそれとの差異は、究極的には、経営に流入する際の価値額と流出する際の価値額との差異としてのみ存在しうるのであり、それは必ずいずれかの経営のいわゆる損失もしくは利潤として経営に帰着し、経営以外には帰着する場所を有しない。すなわちそれは、このような意味においても個別経済の内面的な大ききである。最後に、市場において価値額として価値が現実化する場合においても、市場において相互に交渉をおこなう市場当事者は経営もしくは経営に所属するのであって、市場における交渉の根本にあるのは各経営の欲求全体 (Bedarfsgesamt) であり、欲求全体は、欲望を基礎にして、その経営に存在する価値全体と経営の使命との関係によって規制されるものであって、全く個別経済的なものであり、経営の内面において形成されるものである。^③価値が内面的な大ききであるとは、要するに、独立的分業的経営という経営段階においても、価値の形成は経営外部においては考えられないということであるが、このことは、経営が経済の形式であることを別の観点から表現するものにすぎないであらう。いずれにしろこの意味においても、ニッケリッシュにとって「価値問題は経営経済的問題なのである」^④。

② H. Nickisch, Die Betriebswirtschaft, Stuttgart 1929~32, S. 6.

③ R. Ehrenberg, Der Handel, Jena 1897, SS. 21—24.

④ Nickisch, a. a. O., S. 38. ⑤ Nickisch, a. a. O., S. 34.

⑥ Nickisch, a. a. O., S. 40.

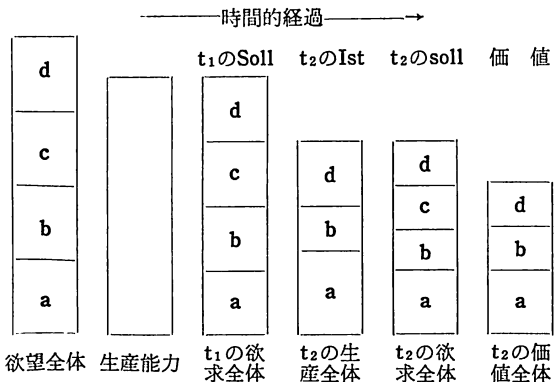
⑦ Ruf, a. a. O., S. 110.

⑧ Nickisch, a. a. O., S. 40—41.

⑨ H. Nickisch, Wert, wirtschaftlicher Wert, Bilanzwert, ZHWp., 21. Jg., S. 177.

ニッケリッシュの価値論(大橋)

- ⑥ Nicklisch, Betriebswirtschaft, S. 41.
 - ⑦ Ruf, a. a. O., S. 109.
 - ⑧ Ruf, a. a. O., S. 111. Witmann, a. a. O., S. 15.
 - ⑨ K. Marx, Das Kapital, 1. Kapitel.
 - ⑩ Nicklisch, a. a. O., S. 41.
 - ⑪ Nicklisch, a. a. O., S. 63.
 - ⑫ Nicklisch, a. a. O., SS. 63—67.
 - ⑬ Nicklisch, a. a. O., S. 67.
 - ⑭ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ⑮ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ⑯ Nicklisch, a. a. O., S. 67.
- ⑰ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ⑱ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ⑲ Nicklisch, a. a. O., S. 63. ⑳ Nicklisch, a. a. O., S. 67.
- ㉑ Nicklisch, a. a. O., S. 62. ㉒ Nicklisch, a. a. O., S. 67.
- ㉓ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㉔ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㉕ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㉖ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㉗ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㉘ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㉙ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㉚ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㉛ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㉜ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㉝ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㉞ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㉟ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊱ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊲ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊳ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊴ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊵ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊶ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊷ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊸ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊹ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊺ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊻ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊼ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊽ Nicklisch, a. a. O., S. 62.
- ㊾ Nicklisch, a. a. O., S. 67. ㊿ Nicklisch, a. a. O., S. 62.



- ⑳ Nicklisch, a. a. O., SS, 67—68.
- ㉑ Nicklisch, a. a. O., S. 68.
- ㉒ Nicklisch, a. a. O., S. 85.
- ㉓ Nicklisch, a. a. O., SS, 36—37, 50—51.
- ㉔ Nicklisch, a. a. O., SS, 70—71. G. Völker, Heinrich Nicklisch, Stuttgart 1961, SS, 18—27.
- ㉕ ニックリッシュのこのような段階区分が社会経済的基礎の歴史的變化を完全に説明しうるものではなくて、単に欲望充足の規模における社会的分業の程度をさすものになります、それによってニックリッシュの経営学に歴史的な考察を可能にするようなものでないことは、すでに中村常次郎教授の指摘されているところである。中村常次郎「経営概念と価値循環」東京大学経済学論集第二十五卷一・二合併号三八五ページ。
- ㉖ Nicklisch, a. a. O., S. 36.
- ㉗ Nicklisch, a. a. O., S. 46.
- ㉘ Nicklisch, a. a. O., S. 69.
- ㉙ Nicklisch, a. a. O., S. 74.
- ㉚ Nicklisch, a. a. O., S. 76.
- ㉛ Nicklisch, Wert, wirtschaftlicher Wert, Bilanzwert, a. a. O., S. 180.
- ㉜ Nicklisch, a. a. O., S. 178. derselbe, Betriebswirtschaft, S. 84.
- ㉝ Nicklisch, a. a. O., S. 84.
- ㉞ K. Schmalz, Die Erforschung der Wertlaufprobleme des Betriebes durch Nicklisch, ZHWHP, 29. Jg., S. 159.
- ㉟ Nicklisch, a. a. O., S. 35.
- ㊱ Völker, a. a. O., S. 21.

三 価値循環論

以上のごとくわれわれのみるところ、ニックリッシュ第三期における価値概念は次の五つの命題に集約されうるのである。

- (一) 価値は、欲望充足の適性を根本とするが、労働を必須要件とする。
- (二) 価値は主観的なものである。
- (三) 価値は実現である。
- (四) 価値は全体経済的次元において成立する。
- (五) 価値は経営の内面的な大きさである。

この五つの命題はいうまでもなく価値にたいする根本的な規定であって、このような根本的性質をもつ価値は具体的場合においてさまざまな形式をとって現象する。すなわちニックリッシュによれば、価値はまず「生産された価値」(der produzierte Wert)、「使用価値」(Gebrauchswert)として出現し、両者はさらに「市場価値」(Marktwert)として一つのものに合体する。しかし価値のこれらの諸形態にたいするニックリッシュの説明は、旧来の所説を整理、敷衍して完全なものにしたにすぎないのであって、ごく部分的な修正を除けば、基本的には旧来のものとかわるところがないので、ここでは、さきの価値概念との関係において簡単にふれるにとどめる。生産された価値は生産者による評価によって成立する価値であるが、それは「財在庫と欲求との間の関係を考慮して生産されたとみなされる価値」^①であるから、旧来の価値論との関係でいえば、旧来経済的価値としての生産価値(Produktionswert)と表示されていたものに該当する。ニックリッシュはこの生産された価値を生産価値、費消

価値 (Aufwandswert) もしくは支出価値 (Ausgabenwert) と混同してはならぬとして、この場合の生産価値を「生産物産出のために費されなければならない物財や用役にたいする一切の支出の合計」たるものであり、要するに「生産物の支出価値である」としているので、これは一九二二年『商事経営学』では製造価値 (Herstellungswert)、一九二一年『経済的経営学』では産出価値 (Erzeugungswert) とよばれていたものに相当する。また、欲望者の評価として成立するものが使用価値であるが、それは旧来の経済的価値としての使用価値である。かくして生産された価値と使用価値とは、評価者を異にするが、同一基盤にたつところから、市場における生産者と欲望者、すなわち売手と買手との商議により一つのものに結合されることとなる。それが市場価値である。したがって市場価値こそが価値の現実の形態、いわば眞の形態であり、ここにおいて価値形成は終了する。これにたいして、同じ価値の形態とはいえず生産された価値、使用価値は価値形成の途上にあるものであり、その準備であつて、価値形成の萌芽 (Wertbildungsansatz) たるものにすぎない。それはともかく、ニックリッシュはこの市場価値について『経済的経営学』とほとんど同様の叙述をおこなっているが、ただ注目されるべきことは、独占の場合について、『商事経営学』においても『経済的経営学』においても「生産者にとって最大の利益となる価格を確定することが問題である」としていたが、『経営経済』においては「販売が全体経済にとって最大の利益でおこなわれるその価値の確定が問題である」と修正していることで、この点は全体主義的立場の貫徹の一つの現われとみることができよう。

以上要するに、生産された価値、使用価値、市場価値についてのニックリッシュの叙述は、ニックリッシュ価値論の出発点となつた一九二二年『商事経営学』におけるそれと基本的にはなんらかわっていないのであり、これら価値の分析用具としてたとえば限界概念が利用されていることも一九二二年以来かわるところがないのであるが、

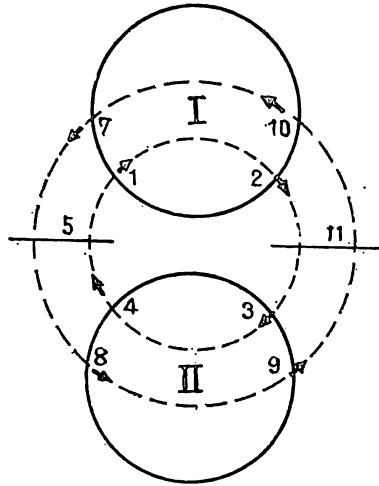
ニックリッシュの価値論(大橋)

しかしながらこのことは、価値論の根本思想、根本的性格が一九二二年以来変化していないことを意味するものではもちろんない。一九二二年においては、分析用具として限界理論が用いられたばかりではなく、限界主義経済理論を確立した限界効用学派の、新歴史学派の倫理的経済学に反対という精神、すなわち、価値判断を排除し精密科学たることを要請した精神、思想をもニックリッシュは受け容れそれにしがったのであるが、『経営経済』においてはこの精神はもはや全く棄て去られ、限界概念が分析用具としてのみ利用されるにすぎないのである。^①このことは、浪漫主義経済学の泰斗シュパンが最初は価値論を限界効用学派の理論を基礎にして築いたが、後にそれを棄却し、一九二五年以後には同一重要性 (Gleichwertigkeit) というシュパンの普遍主義的思想により適合した概念に到達し、その上に価値論や価格論を構築したのと軌を一にするのである。^②

ニックリッシュのいう価値の内容は以上において大体明らかになったのであるが、ニックリッシュはこのような価値概念の上にたつて価値循環論を展開する。価値循環論はすでに『経済的経営学』において登場したものであり、われわれもすでに一言したところであるが、ここにおいてさらに価値概念、価値諸形態との関係において若干論及しておきたい。さて、ニックリッシュ経営学の根底には価値があるといつても、それは具体的には、価値循環、価値の流れとしての価値であつて、ニックリッシュ経営学の一応の到達点である『経営経済』の基礎をなす経済性論にしても、直接的には価値そのものではなくて、価値の流れにおける問題であるから、価値概念、価値諸形態も価値循環論との関連において明確化されておく必要がある。前述のごとく価値は、ニックリッシュによると、具体的にはまず生産された価値および使用価値としてあらわれてくる。それらは確かに生産者もしくは欲望者による評価ではあるが、しかしその基礎に必ず適性が存在しなければならず、適性を基礎とするものと考えられていることがまず注意されるべきである。だが生産された価値と使用価値とは、『商事経営学』では経済的価値と表示され

ていた範疇に属する。また前述のごとく『経営経済』でも、生産された価値とは別の概念として生産価値が存在し、それは旧来の表現では技術的価値たるものである。このようにみてみると、確かに『経営経済』では『商事経営学』にあった技術的価値としての使用価値が、それだけでは価値たりえないとして独自の価値とはされていないけれども、しかし、根本的にはニックリッシュは、この段階においても依然として価値を、いわゆる技術的価値の領域と経済的価値の領域という二つの領域において考えているのではないかということが、推測されるのであって、そのことは、『経営経済』の出版の前年の論文“Wert, wirtschaftlicher Wert, Bilanzwert”において、『商事経営学』では技術的価値とされていた「欲望充足のための技術的適性」が広義の価値として、また経済的価値とされていた「財在庫と欲求との関係が含まれる大きさ」が狭義の価値として示されているところからも、十分いわれうるであろう。しかし『経営経済』においては、『商事経営学』におけるような意味での技術的価値と経済的価値という言葉すらもはや使用されていない。ここで注目されるものが価値循環論である。価値循環は、ニックリッシュによると、給付価値およびその対価の循環たる給付価値循環 (Umlauf der Leistungswerte) と、資本すなわち一般的抽象的価値の利用およびその対価の流れたる財務循環 (Finanzumlauf) とに分かれるが、ここで問題となるのはもちろん第一の給付価値の循環である。給付価値の循環についてニックリッシュは次員のような図式を示している。この場合実線の円Ⅰは本源的経営(家政)を、実線の円Ⅱは派生的経営(たとえば企業)を示し、点線の内側の円は実物としての給付価値の流れを、反対方向の矢印をもつ外側の流れは、それにたいする対価としての抽象的価値の流れを示す。すなわち家政は5の充足財市場で、派生的経営の給付たる充足物を得て、それを家政の給付(たとえば労働)に転化する(1→2)。それは11の給付財市場(たとえば労働市場)を通じて派生的経営に流入するが、この場合派生的経営は、家政から提供される給付のもつ適性と、それにたいする支出とを評定

ニックリッシュの価値論(大橋)



し、支出を正当と考えるとき、それを受け入れる。つまりそれは支出対価値 (Ausgabengegenwert) として受け取られる。3↓4は経営給付の産出過程で、その販売によって循環は終了する。⑤このように給付価値循環は実物の流れとそれとたいする対価としての抽象的価値の流れとのいわば二重構造をなし、両者の流れにおいて循環する価値は、価値として同一の名称でよばれるものではあるが、範疇的には種類を異にするものであることがここではまず注意されなくてはならない。そのことは、たとえばニックリッシュが、実物の流れにおいて基礎にあるものは物財の適性であるとしているところや、さらには、生産物の生産に必要であった一切の消費分、すなわち原料、補助材料、消耗価値 (たとえば設備の消耗分)、利用価値

(たとえば土地についての)、経営外第三者の給付、および経営給付を包括するものは費消価値であって、それがすなわち生産価値であるとしているところから、はっきりうかがいうるのである。⑥ニックリッシュはこの生産価値と生産された価値との相違を強調して、この両者の差異をなすものが利潤とよばれるものであるとのべているが、^⑦実物の流れにおいて成立する価値概念たる生産価値こそ、旧来技術的価値とされていたものであるから、『商事経営学』における技術的価値の領域と経済的価値の領域との区分に対応するものが、まさに実物循環と対価循環との二つの区分であり、それは『商事経営学』における区分をさらに発展させたものとみることができるのである。このことは、経営の内容、運動、流れを価値の流れとして統一的に把握する価値循環論がはじめて提示された『経済

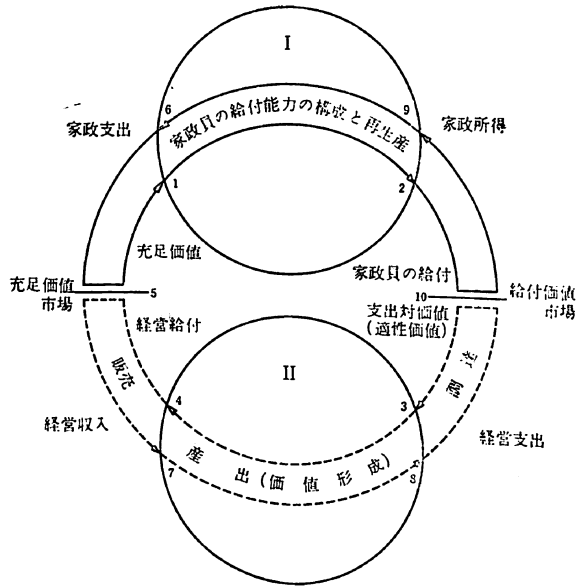
『経営学』において、価値は根本的には適性価値一本であることが強調され、技術的価値と経済的価値との対向が後退し、そういう言葉すらほとんど使用されていないことも符合する。^⑩ いずれにしろここでは、一口に価値といってもニックリツシュの場合には、価値の流れに実物循環と対価循環とがあることから、物量概念としての価値と、貨幣で表現された、いわゆる貨幣価値概念としての価値とがあることがさしあたりまず注意されるべきであり、生産価値、費消価値は前者に属するのである。

ところでわれわれは、『商事経営学』における技術的価値と経済的価値について、すでに、それら両者が次元を異にするものであって、たとえばマルクスにしたがってそれを表現するならば前者はいわゆる価値たるものであり、後者は価格たるものでないかということ指摘したのであるが、周知のようにマルクスの場合、価値と価格とは、単に貨幣価値によって表現されるか否かの違いをなすだけではなくて、価値から価格への転化の過程において剰余価値のいわば社会的配分が生じ、剰余価値が利潤として現象するのである。ニックリツシュは生産された価値と生産価値との差が利潤であろうとしているが、そのことは、マルクスの前に前者を価格、後者を価値とみる時、ニックリツシュのいう利潤がマルクスでいう価値から価格への転化による利潤の成立現象をさすものと解せられるであろう。ニックリツシュの場合 $\text{中野みよ子訳} \equiv \text{中野訳} \equiv \text{中野訳}$ の時利潤は生じないのであるが、このことは、マルクスの観点よりするならば価格が価値通りきまる時利潤は存在しないことを、すなわち $\text{中野訳} \equiv \text{中野訳} \equiv \text{中野訳}$ の時利潤は存在しないということを、主張することである。かくみるならばニックリツシュの利潤概念、価値概念の特徴は全く明らかである。すなわちニックリツシュには剰余価値と利潤との区別はもちろんのこと、そもそも剰余価値の概念がないのであり、剰余価値の生産という問題意識がないのである。生産された価値が生産価値と等しい時とは、生産に必要であった一切の給付の提供者にたいして給付通りの支払がなされる時をいうのであるが、そのような時

ニックリッシュの価値論(大橋)

には労働者にも給付すなわち労働通りの支払がおこなわれる時であるから、いわゆる剰余労働が存在しない時であり、剰余価値も存在せず、したがって利潤も存在しないことになり、剰余価値などという概念は不必要になる。またニックリッシュによれば給付をおこなうものはひとり労働者のみではないから、給付と支払とが不一致であることから生ずる利潤の源泉は、労働者の労働だけではないのであり、この点からも剰余価値という問題意識そのものさえニックリッシュには生じないのである。しかしながらこのことは、ニックリッシュの理論体系の中に、マルクスによれば剰余価値であり利潤たるものが真に存在しないことを、もちろん意味するものではない。それは、われわれのみるところでは、まさに隠蔽されているにすぎないのであり、ニックリッシュ自身隠れたる費消 (stillter Aufwand) とよぶものこそまさにそれであるが、この点については稿をあらためて論じることにし、ここでは、ニックリッシュの価値概念について、以上の価値循環論との関連において今一度論及しておきたい。

さてニックリッシュのさきの価値循環図式は、実物と抽象的価値との全体経済的流れ、すなわち経営間の流れ、関係に重点をおきたいわば一般的段階における価値循環図式ともいうべきものである。このようなニックリッシュの価値循環図式をフェルカーは次図のごとく敷衍、修正している^⑤。この図式こそは個別経済的な価値循環図式であるといわれうるものであるが、この図式をみる時、われわれはそれがマルクスの提示した資本循環公式 $G \rightarrow W \rightarrow P \dots P \dots W' \rightarrow G'$ ときわめて類似していることに注意を払わざるをえない。マルクスの場合にはいうまでもなく資本が循環し、それが $G \rightarrow W \rightarrow W' \rightarrow G'$ と姿態を変換するのであって、貨幣も商品も資本としては同一範疇に属する。それがニックリッシュにおいては、要するに価値として把握され、価値が経営支出 \downarrow 支出対価値 \downarrow 経営給付 \downarrow 経営収入と循環するものと理解されるのであって、ここでは価値は、マルクスの例えば資本にあたるものをさすことになる。前述のようにニックリッシュにおいても資本という概念が存在するが、それは給付物にたいする抽象



変換 (Metamorphose) としてとらえ、資本循環としてとらえなかつたところにある。ただし、資本循環としてとらえることはすなわち単なる価値循環過程ではなくて価値増殖過程としてとらえることをただちに意味するからである。それは前述の剰余価値の否定に通ずるのであるが、さて、ニッケリッシュは生産価値と生産された価値との差が利潤であるとしているが、それは、マルクスの公式では W' と W との差ということであり、商品が価値通

的価値持分としての購買力、すなわち貨幣の利用権の委託関係を示すものであって、資本を生産関係とみるマルクスのそれとは本質的に異なるものである。しかしそのことは、マルクスのにいえば資本であるところのものが、ニッケリッシュ第三期においても全然無視されていることを意味するものではなく、それも価値として、たとえマルクスと同じ意味においてではないにしろ、ニッケリッシュの体系の中にやはり存しているといわざるをえないのである。このことはニッケリッシュが、その理論構築において、やはり現実の資本主義的生産様式から出発していることを意味するであろうが、しかしニッケリッシュの特殊性は資本という生産関係の存在の無視して、経営過程をあくまで価値循環、価値の姿態

ニックリッシュの価値論(大橋)

りに販売されれば W' と G' との間には差のないことを主張するにすぎない。マルクスによれば新しい価値が生まれぬその過程においてのみ、ニックリッシュは利潤が生ずるといっているのである。すなわち「経済性は労働過程より生じるが、利潤は労働の結果の分配過程より生ずる」と。^②

かくてニックリッシュにおいては、問題は分配過程に求められることになる。労働過程より生ずるはずの経済性にしても、すでに市原季一博士が鋭く批判されているように、その範囲は分配の領域に限られてしまうのであり、問題は給付通りの支払いかにしてなされるかということだけになる。要するにニックリッシュにおいては、生産ではなくて分配が根本的な第一次問題として浮び上ってくることになり、ニックリッシュ経営学は分配論たる性格をもち、この点では、生産よりも分配に問題を求め分配さえうまくいけば生産は自づからうまくいくと考えた新歴史学派の立場に接近することになる。価値論はそのようなニックリッシュ経営学の基礎をなすものである。このことは、ニックリッシュの価値論がそもそも、その根本において、いわば生産のための価値論ではなくて分配のための価値論であったことを容易に推測させるのであるが、そのことは、価値計算は成果分配のため計算であるというニックリッシュの考えに、明瞭にあらわれている。

注① Nicklisch, Betriebswirtschaft, S. 78.

② ニックリッシュの一九二二年「商事経営学」における価値論については、拙稿「ニックリッシュ商事経営学における価値概念についての一考察」関西大学商学論集第一〇巻第二号所収を参照されたい。

③ Nicklisch, a. a. O., S. 79.

④ Nicklisch, a. a. O., S. 78.

⑤ H. Nicklisch, Allgemeine Kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie), Bd. 1., Leipzig 1912, S. 31. derselbe, Wirtschaftliche Betriebslehre, S. 26. ただし傍点は大橋のものである。

- ⑥ Nicklisch, Betriebswirtschaft, S. 83. ただし傍点は大橋のものである。
- ⑦ ヴァイスマンは「経営経済」においてもニックリッシェが限界効用学派ともちろん訣別していないが、かれの主張が多くの点で限界効用学派の主張と相容れないことも事実であることへの、両者の本質的な差異は、ニックリッシェが「ある財が類似もしくは異つたる欲望の充足に役立ちうる時、そのものの価値を決定するものは、問題となる諸欲望に帰せられる平均的意義である」として、平均概念を導入するところにあるところ⑧。しかしながらここでニックリッシェがいう平均とはあくまで一個別経済内における平均であり、たとえば一個別経済内においても、あるものにたいする欲望の度合は場合のいかんにより種々であるが、それを平均したものがここでいう平均であって、複數個別経済による欲望にたいする意義の平均ではない。平均概念が妥当性をもつのはニックリッシェの場合個別的価値としての価値の段階であって、個別的価値から一般的価値が形成される場合、すなわち一般的価値の段階ではもはや妥当しないものと考えられているのであつて、限界効用学派との訣別の論拠はもちろんここに求められることはできな。
- ⑧ 大野信三「経済学史」七八四ページ。
- ⑨ Schmaltz, a. a. O., S. 159.
- ⑩ 市原幸一「ドイツ経済学」三三三—三三三ページ。
- ⑪ Nicklisch, Wert, wirtschaftlicher Wert, Bilanzwert, a. a. O., S. 177.
- ⑫ 価値の流れの思想が登場したのは「経済的経営学」においてであつたが、しかしそこでは未だ資産の運動たる Umsatz や Absatz を統一的に把握するものとして登場しているにすぎず、したがって財務循環はまだ現われていない。なお財務循環は、清水宗一「ニックリッシェの財務論」関西大学商学論集第九巻六号所収にくわしく紹介されている。
- ⑬ Nicklisch, a. a. O., SS. 105—107.
- ⑭ Nicklisch, a. a. O., S. 106.
- ⑮ Nicklisch, a. a. O., SS. 101, 513.
- ⑯ Nicklisch, a. a. O., SS. 101—102.
- ⑰ Nicklisch, Wirtschaftliche Betriebslehre, SS. 11—13
- ⑱ 前掲拙稿。
- ニックリッシェの価値論 (大橋)

ニックリッシュの価値論(大橋)

- ⑲ Nicklisch, Betriebswirtschaft, SS, 158, 513, 517.
 ⑳ Volker, a. a. O., S. 33.
 ㉑ ただし、価値循環にたいするニックリッシュの第一の問題意識は全体経済的な価値の流れを捕捉し、それによって経営を規定することであるから、この観点からはニックリッシュ自身の示した図式がより適切であることはいうまでもない。
 ㉒ Nicklisch, Wirtschaftliche Betriebslehre, S. 2.
 ㉓ 市原幸一『メイトン経営学』第八章第四節。
 ㉔ Nicklisch, Betriebswirtschaft, S. 57.
 ㉕ Witmann, a. a. O., S. 12.

む す び

『経営経済』に代表される第三期のニックリッシュの価値論が分配のための価値論であって、ニックリッシュ経営学が分配論であることは、ニックリッシュが一九一二年『商事経営学』における立場から離れ、それと相反する性格のものに移行したことを示すものであるが、さらに、『経営経済』におけるニックリッシュの価値論、従って経営理論の性格を規定する今一つの根本的特質として、われわれは価値概念の普遍主義的规定をあげざるをえないのであって、ここにニックリッシュの浪漫主義的普遍主義への移行は完成したものと考えられることができる。カインホルストは、ニックリッシュの思考過程がナチス的理念の世界と平行して進められていることを指摘し、ニックリッシュを直截に普遍主義者(Universalist)と規定しているが、そのことは、カインホルストが論究の対象とはしなかった価値論におけるニックリッシュの主張からも正当であるといわざるをえない。とはいえもちろん、カインホルストがニックリッシュのために弁解してやっているように、ニックリッシュがナチスに共鳴したのは、ナ

チスによって、かれの主張する共同体の理念が実現されうるとみたためであって、ナチスの実現したものが見せかけだけの共同体騒ぎ (Gemeinschaftsrummel) でしかなかったことについては、^④ニックリッシュはあるいは被害者であったかもしれない。しかしその場合においてもニックリッシュがナチスの評価を誤ったことについてニックリッシュは当然責任を負わなければならないであろう。いずれにしろ今やわれわれはニックリッシュの共同体論そのものに進まなくてはならないが、それについては稿をあらためて論じることとし、ここでは最後に、価値概念そのものに関する二、三の論点にふれておきたい。

その第一は、ニックリッシュの価値概念が経営経済学的性格のものではなくて、国民経済学的性格のものではないかという問題である。たとえばルーフはこの点に関して次のようにのべている。「ニックリッシュによってなされた研究は国民経済学的性格のものである。かれが経営経済学者として現われるのはかれが評価 (Bewertung) の諸関連を説明する時である。評価原則をニックリッシュは市場価値：からはじめる。市場価値は『現実の価値』として、日常の評価の確実な出发点たる機能を有するからであるが、ニックリッシュによれば価値発生を説明する意義をもつものは適性価値であるはずなのに、評価問題そのものについては他の価値をもってするので、ニックリッシュにおいてもまた、適性価値そのものから直接評価原則を導いてくることがおこなわれないのである」^⑤。このようなルーフの、ニックリッシュの価値論にたいする見解は、価値問題を、国民経済学的には価値問題であるが、経営経済学的には評価問題であるという観点から究明しようとするルーフの根本的な問題意識からくるのであつて、そのような態度を、経営学における価値問題にたいする接近方法として正しいとする場合にのみ認められるものである。しかし、少なくともニックリッシュ経営学においては、価値論をそのような観点からのみ問題にするとは明らかに狭きにすぎるのであつて、当を得ていないといわざるをえない。確かにニックリッシュにおいても評

ニックリッシュの価値論(大橋)

価値論は価値論の上に築かれているが、逆に価値論が評價論の基礎たる意味しか有しない考えるのは、全く不当であつて、価値論は少なくとも『経営経済』においては、何よりもまず、価値循環論の基礎として、従つて経済性論の根本をなすものとして位置づけられなければならない。しかしながらそのことは、ニックリッシュのいうごとく、価値問題がそのことの故をもつて直ちに本来の経営経済学の問題となりうることを意味するものではない。つまり、適性が価値の基礎ではあるが適性それのみによつては価値たりえないとニックリッシュ自身がいうのと全く同様な意味において、価値論そのものは、少なくともニックリッシュの形態におけるそれは、経営経済学理論の根本的前提、基礎として考えられるべきものであろう。価値論が経営経済学本来の分野に属するものかどうかはともかくとして、従つてよしルーフのごとくニックリッシュの価値論を国民経済学的人格のものであるとしても、価値論がニックリッシュ経営経済学の根本をなすものであることは疑いないのであつて、ニックリッシュ経営経済学の根本的見地、根本思想が究明されるべき場合には、価値論がまず第一に考察されねばならないことは全く明らかである。

また、ニックリッシュの価値の概念そのものについて、それは価値あるもの(Wertvoll)ともいわれるものを総称したものであつて、学問的に一義的な価値概念がニックリッシュの価値論には存在しないという批判がなされている。^⑧この批判にはわれわれも全く賛成であつて、われわれもニックリッシュの価値概念の中に、古典学派やマルクスのいへば価値の次元たるものと商品の次元たるものとの間にさえ範疇の混乱があるのではないかということにまず指摘したところである。さらに価値と価格との次元が明確に区別されるべきであり、価値の次元そのものにおいても周知のように使用価値と交換価値とがあり、従つて価値には、ごく一般的に表現すると、単なる物の有用性を意味する「事実をあらわす価値」(value as descriptive)と、ある物が単に有用であるだけでなくてさ

らに選ばれるに値するものであることを表明する「当為をあらわす価値」(value as prescriptive)とがあるのであって、^① ニックリッシュにおいてはこれらの諸範疇、諸概念が不明確のまま価値という言葉のもとに混在しているが、これらは明確に区別されるべきものである。かれはすでに『組織論』において価値を認めることすなわち価値判断を認めることであるという明確な主張をなし、^② またそれにもとづいて『経営経済』におけるも、Wertfreiheitと Wertbezogenheit とを対立するものとして理解しているが、^③ 概念の不明確を、粗雑をなすニックリッシュの経営経済学の一大の到達点と見ざる『経営経済』の根本をなす価値論においても、脱却をされていないといわねばならぬ。

注① Keinhorst, a. a. O., S. 94. ニックリッシュとナチスとの関係については池内信行『経営経済学史』第三篇、高田馨「経営共同体の原理」附録第一にくわむこと。

② Keinhorst, a. a. O., SS. 100-101.

③ Ruf, a. a. O., SS. 111-112.

④ Ruf, a. a. O., S. 9 ff.

⑤ Nicklisch, Betriebswirtschaft, S. 328 ff.

⑥ Ruf, a. a. O., S. 112.

⑦ W. Ash, Marxism and Moral Concepts, New York 1964, chapl. 1.

⑧ Nicklisch, Der Weg aufwärts I Organisation, S. 30.

⑨ Nicklisch, Betriebswirtschaft, S. 29.

〔一九六五・一〇・一〇〕